

学校図書館員のリカレント教育における

e ラーニング型協同学習の試み

— 学習活動支援特論の実践を例に —

朝倉 久美、野口 久美子

E-learning cooperative learning in recurrent education for school librarians :
Case study of Special Topics in Learning Activities Support

ASAKURA Kumi, NOGUCHI Kumiko

キーワード：学校図書館、協同学習、e ラーニング、リカレント教育、探究学習

1 はじめに

1.1 本研究の背景と目的

本稿の目的は、学校図書館専門職養成応用プログラム科目「学習活動支援特論」の授業実践をもとに、学校図書館員のリカレント教育に e ラーニング型協同学習を取り入れる意義と可能性について考察することである。本科目は学校内外における学習者の支援を実践的に考えることをねらいとし、2018 年度秋期に新規開講された。大きな特徴は「全編にわたってワークショップ形式を取り入れ、学生同士の対話や創造性を重視した授業」⁽¹⁾、つまり e ラーニング型協同学習を行うとした点にある。学校図書館員のリカレント教育という枠組みにおいて、e ラーニング型協同学習はどのような意義や可能性を持つのだろうか。

本稿ではまず、学習活動支援特論を開講するに至った経緯、授業の概要、開講後の状況を整理する。次に本科目の特徴である e ラーニング型協同学習について、実際の授業事例に基づき検討する。最後に、学校図書館員のリカレント教育に e ラーニング型協同学習を取り入れる意義と可能性について考察する。

検討の際に用いる資料は本科目のシラバス、教材（配信スライド）、授業中の受講者の発言記録、受講者から提出されたレポート、ワークシート及び本稿の筆者の一人である朝倉に対して行ったインタビューの逐語録（2018 年度秋期授業終了後、2018 年 10 月 29 日に実施。インタビューは野口）である。受講者の授業中の発言記録、レポート、ワークシートについては研究以外の目的で利用しないこと、個人が特定できない形にすること、利用を拒否する場合も成績評価に影響しないことを文面にて説明し、承諾が得られたもののみ利用している。

筆者の立ち位置については、朝倉は学習活動支援特論の担当者であり、野口は学校図書館専門職養

成プログラムの開講責任者として学習活動支援特論の授業運営をサポートするとともに、受講者に交じって協同学習の一部に参加した立場である。

1.2 本稿における協同学習の定義

協同学習 (cooperative learning) とは、「協力して学び合うことで、学ぶ内容の理解と習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学び、内化することを意図した教育活動」⁽²⁾である。協同学習の権威であるジョンソンらは協同学習に必須の 5 つの要素について、以下のように説明している⁽³⁾。

- ① 互恵的な相互依存性：学習目標に対し、仲間同士で相互依存的な関係を作ることを求める。
- ② 学生同士が直接顔を合わせての励まし合い：学習過程において、互いに協力し、支え合い、励まし合うことを前提とする。
- ③ 個人の責任（自分の行動を説明する責任）：自身の学びに対する責任を果たすとともに、ともに学び合う仲間の学びについても責任を持つ。
- ④ 対人・対集団に関する能力（社会的技能）：集団での学び合いに必要なスキル（リーダーシップ、意思決定、信頼形成、コミュニケーション、紛争処理など）を獲得できるよう支援する。
- ⑤ 振り返り：学習の結果に対する評価を行うことを保証する。

協同学習の実施にあたっては「メンバー相互の交流の質を高め、メンバー一人ひとりがグループの学習活動に積極的に貢献するという協同の意義と、それを受け入れ、醸成する学習の場の創出」⁽⁴⁾が前提となるという。協同学習の基本は学習目標の達成に向けて学習者が相互に協同の精神を持ち寄り、行動することであり、その点において授業の進め方の技法とイコールではないことに留意する必要がある⁽⁵⁾。

なお、協同学習と類似の用語として、協調学習 (collaborative learning) がある。両者の違いについて、溝上慎一は次の 2 点に整理している⁽⁶⁾。一点目は、協同学習は協調学習よりも授業デザインにおいて構造化されており、かつ教員主導型であることである。協同学習は一定の枠組みの中で行われるのに対し、協調学習は時に教員の意図を外れて進むことを許容する。二点目は、プロセスに重きが置かれるのか、プロダクトを重視するののかという点である。協同学習は協同の精神を前提に、話し合いや共同作業のプロセスを重視する学習活動である。対して、協調学習は話し合いや共同作業を通してのプロダクト（成果物）がどうだったかを重視する学習活動といえる。

本稿で授業実践として取り上げる学習活動支援特論は大学通信教育設置基準第 3 条の「メディアを利用して行う授業」、つまり e ラーニングによるリアルタイム双方向授業として開設された。受講者は全国各地におり、自宅等のパソコンで授業に遠隔参加する。教員と受講者、受講者同士のやり取りはチャット機能を用い、テキストを介して行われる。本科目では受講者同士が直接対面することはほぼないものの、互いの年齢や経験を超えて、一定の枠組みの中で協同の精神をもって学び合うプロセスを重視している。以上から、本稿では協同学習 (e ラーニング型協同学習) の用語を用いる。

2 学習活動支援特論の概要

本学では、学校図書館員として学校内外で活躍する人材の育成をねらいとした「学校図書館専門職養成プログラム」(以下、プログラム) を 2018 年度に開設した⁽⁷⁾。プログラムは、基礎と応用の 2 つ

から成り立っている。応用プログラムは基礎プログラムの修了者の履修を主に想定し、本学独自に開設したものである。表1に応用プログラムの目標、開設科目をまとめた。必修科目7科目14単位に加え、選択科目3科目6単位以上、計10科目20単位以上の修得を修了要件としている。

本稿で取り上げる学習活動支援特論は応用プログラムの必修科目として、2018年度秋期に新規開講された。本章では学習活動支援特論を開講するまでの経緯、授業の概要、開講後の状況についてまとめる。

表1 応用プログラムの目標、開設科目

目標			
1. 児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、学校教育の充実に貢献し得る専門的知識、技能を有していること			
2. 学校における図書館活用教育、読書教育の充実に貢献しうる専門的知識、技能を有していること			
3. 学校図書館が抱える課題について深い問題意識を持ち、その課題に対して論理的、実践的に解決し得る知識、技能を有していること			
4. 学校図書館の発展のために積極的に行動する意欲を持ち、自らの実践を学校内外に発信するための知識、技能を有していること			
開設科目（◎は必修（選択必修）科目）			
学校教育に関する科目	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育カリキュラム実践論◎ ・はじめて学ぶ臨床心理学◎ ・生徒指導・進路指導論◎ ・情報と法（or ケーススタディ著作権法）◎ ・障害児の理解と支援（or 情報アクセシビリティとバリアフリーデザイン）◎ ・教師論概説～教育者としての教師論～ ・学校経営・教育行政論 ・学校における人権 	学校図書館に関する科目	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動支援特論◎ ・読書教育特論◎ ・読み聞かせと生涯学習 ・学校・家庭・地域の連携協力論 ・児童資料特論 ・特別研究（学校図書館学Ⅰ） ・特別研究（学校図書館学Ⅱ）

2.1 開講の経緯

応用プログラムの新規科目として学習活動支援特論を開講するにあたり、プログラムの開講責任者である野口は以下の3点を念頭に置いて構想を練った。

第一に、基礎プログラムの要件科目である「学習指導と学校図書館」を履修済みという前提で、教授内容を検討することである。つまり、学習活動支援特論は学習指導と学校図書館の応用編ともいうべき内容としたいと考えた⁽⁸⁾。履修条件については応用プログラムの必修科目である点を鑑み、現職の学校司書、司書教諭及び将来的に学校図書館で働くことを希望する人を基本とし、学校内外で行われる学習支援に関心のある方も受講可とした。この点について、朝倉は2018年度秋期授業終了後に実施したインタビューにおいて、「探究学習という言葉を知らない、どうしようもない（筆者注：けれど）、勘違いはあっていい。（中略）（筆者注：探究学習について）知ってなくてもいいし、できなくてもいいんだけど、図書館このままではいけないよね、司書は変わらないといけないよねっていう意識さえあれば、大丈夫だと思いました」と語っている。

第二に、eラーニング型協同学習が可能な開講形態とすることである。学校図書館現場の事例紹介、

受講者同士のディスカッションやプレゼンテーションを取り入れ、探究学習や情報リテラシー育成についての考えを深めること、協同学習を通して得た成果を学校内外で応用し、実践できること、以上の目標を達成可能な開講形態にしたいと考えた。

第三に、授業担当者は学校図書館現場をよく知る人物とすることである。教育学や図書館情報学の理論を押さえた上で、その考え方を児童生徒の探究学習の支援に応用した経験がある方に教授いただきたいと考えた。実践者である現職の図書館員が授業を担当することの意味は、授業設計の試行錯誤そのものを見せられることにあると考える。朝倉は講師依頼を受けた当時のことを振り返り、「探究学習をきちっとできる人を育てる人間としてチョイスされたわけではなくて、あくまでも先に進むための背中を押して、ちょっと半歩先から引っ張ってっていうような立場として…というお話だったので。何をお引き受けするにしても、(筆者注：児童生徒の探究を支援する実践者として)その先を見せなきゃいけないだろうな、という意識にはなった」とインタビューの中で語っている。

以上を踏まえ、非常勤講師の就任を朝倉に打診し、学習活動支援特論を集中講義で開講することになった。プログラムの開講準備を進めていた2017年当時、朝倉は長野県立高校の学校司書として勤務しており、学校図書館員として約20年のキャリアの蓄積があった。その間、学校外でも学校図書館員向けの研修講師を担当し、成果をあげてきた⁹⁾。また、学校図書館勤務の傍ら、高校情報科の教員免許を通信教育で取得、大学院にてデジタルアーカイブと図書館に関する研究に取り組むなど、学校教育や資料アーカイブの知識の研鑽に努めてきた。2018年4月からは県立長野図書館企画協力課に在籍し、リテラシープログラムの設計などを担当している。

2.2 授業の概要

表2は2019年度春期のシラバス及び配信教材をもとにまとめた授業の概要である。2019年度春期は6月の毎週土曜日に実施した(6月8、15、22、29日、一日4コマ、最終日のみ3コマ)。開講形態は大学通信教育設置基準第3条の「メディアを利用して行う授業」(本学では「スクーリング科目」と称する)であり、ライブ受講を原則とした。講義の他、毎回必ず1~2つのワークを行うことを基本としている。90分授業のうち30~45分程度をワークに充てるという形態である。加えて、教育関係機関との連携の姿を見せ、専門家と協力体制を取ることの意義を示すべく、株式会社ポプラ社で「総合百科事典ポプラディア」の編纂に携わり、百科事典活用の出張授業を行っている齋木小太郎氏にゲスト講師を依頼した(第7~8回)。

授業で用いる教材(スライド、ワークシート)は授業前日までに受講者に配信した。受講者はあらかじめ教材をダウンロードし、授業中は朝倉の指示のもと、考えたことや調べたことをワークシートのファイルに直接書き込むようにした。事前課題がある回もあった。評価方法はワークシート、事前課題の提出(40%)、最終試験レポート(40%)、受講態度(ワークへの参加姿勢、授業中の発言、質問内容など/20%)により、総合的に判断するとした。

2.3 受講者の状況

本科目の受講者は2018年度秋期、2019年度春期ともに4名であった。開講当初、受講者の大半は学校図書館員、特に学校司書として勤務する学生になると見込んでいたが、実際には受講者の約半数は公共図書館員、地方公務員(生涯学習課)、教育業界関係者であった。朝倉は2018年度秋期の授業終了後インタビューにおいて、「学生さんの様子が全く分からなかったので…ただ、(筆者注：受講者から提出されたワークシートに記入の)プロフィールから、この人数なのに全員バラバラなんだとい

表2 2019年度春期 授業概要

学習の要点 (学習目標)		
(1) 学校司書の専門性を理解し、学校図書館の教育的な意義について説明できる。		
(2) 探究学習ワークを学びに応用するための議論ができる。		
(3) 多様な資料やメディアを活用し、学校現場で生かすためのアイデアを生み出すことができる。		
授業計画		
回	タイトル	内容
第1回	イントロダクション 教育機関としての学校図書館	自己紹介...ワーク①じぶんもくろく 学習内容、授業の流れ、学校図書館専門職とは ワーク②ヒーローインタビュー
第2回	調べ学習、探究学習とは 発達段階に応じた学習支援	学校図書館と学習支援...調べ学習と探究学習、問いをつくる、発達に応じた支援 ワーク③NDC マップ
第3回	教員および他館との連携 授業導入のためのガイダンス	校内連携...学びが生まれる空間とは、ガイダンス (オリエンテーション)、テーマに応じた教材 ワーク④もしものケーススタディ「図書館で○○できないかな?」(図書館授業設計)
第4回	協働学習とメディアの構築Ⅰ 百科事典と新聞教材	学校図書館とコレクション、百科事典と図鑑、新聞活用 (NIE)、著作権教育 ワーク⑤ 私の履歴書をつくろう
第5回	協働学習とメディアの構築Ⅱ 情報機器とリテラシー教育	教育の情報化と情報教育、デジタルメディアの活用、メディアリテラシー、連想検索 (発想のヒント) ワーク⑥じぶんおぼく!
第6回	協働学習とメディアの構築Ⅲ 地域学習と郷土資料	教育課程と地域学習、郷土資料のコレクション構築 (「信州学」の事例)、地域デジタルアーカイブ ワーク⑦どこコレ?
第7回	探究学習実践Ⅰ・Ⅱ 百科事典活用演習	ワーク⑧百科事典活用演習
第8回	講義前半の振り返り 情報と人のつながり	メディアの特性 (情報を「つなぐ」と「つむぐ」)、情報の創造と発信 ワーク⑨妄想遠隔会議
第9回	学校図書館の探究学習Ⅰ 小学校の学習活動支援	本の「あてがい」と「出会い」 ワーク⑩図書館バーチャルツアー ワーク⑪○○な本探し (読書力を問わない読書会)
第10回	学校図書館の探究学習Ⅱ 中学校の学習活動支援	「あてがい」から「選択」へ ワーク⑫図書取物語、ワーク⑬修飾語で語ろう...個々の想像力と発想力を協働へ
第11回	学校図書館の探究学習Ⅲ 高等学校の学習活動支援	進路支援と個人探究 (指導か、支援か) ワーク⑭インタビュー:「知りたいこと」の引き出し方 ワーク⑮一文字福袋:情報のかたまりをプロデュース
第12回	特別活動と学校図書館 社会への接続を考えるⅠ	特別活動、図書委員会、学校行事 ワーク⑯架空の修学旅行のしおりをつくろう
第13回	コーディネーターとしての 司書 (学校図書館職員) 社会への接続を考えるⅡ	多様化する図書館活動、地域社会との接続、司書の役割の広がり ワーク⑰ゲームの達人 学びのコーディネーターとしての司書
第14回	講義のまとめ 将来的な学校図書館とは	講義の振り返り ワーク⑱図書館授業設計 学校図書館の未来、学校図書館専門職の未来

言葉をかけたら良いか、教員とのやり取りを通し、最終的に「図書館で何かをする」ことについてどのような落としどころをつけるか、受講者全員でアイデアを出しながら考えてみようというのが本ワークの趣旨であった。

教員が突然図書館にやってきて「〇〇できますか？」と無理やりな依頼をする。学校図書館ではありふれた風景である。そこで学校図書館員に試されるのは教員が求めることに対し、想像力を働かせながら柔軟に対応していく力、そして提案力である。「〇〇できますか？」と図書館にやってくる場合、教員側はアイデアを持ち合わせていないケースが多々ある。教員の漠然としたプランを聞き取り、それを図書館活用授業に落とし込むためには学校図書館側からの具体的な提案が必要である。その際、教員の学校図書館に対する認知度を探りながら、図書館でできることを提示し、学校図書館への期待度を高めることが求められる。つまり学校図書館は自分にとって使える場所である、教員の希望を聞いてくれる場所であるという認識を持ってもらうことである。スムーズな対応を行うためには日頃からのシミュレーションが重要となる。

朝倉からのシチュエーションの提示の後、まず学校図書館に突然やってきた教員の人物像を受講者全員で設定することになった。今回は「高校の物理の教員、男性、現任校に勤めて5年目であり、現在アクティブラーニング研究主任である」という教員像を設定した。次に、その教員が何を求めて学校図書館にやってきたのかを受講者全員で考えることになった。受講者から「授業なら電力が絡みやすいような気がします。発電の種類、校外学習、実験と幅が広がります」、「校外学習でダムか何かを見学することになっているので、その事前学習を任されているとか」、「ダムと環境はどうですか？」という発言があり、①この教員はアクティブラーニング研究主任として、校外学習の事前学習の計画実施を任されている、②事前学習を行うにあたり、どのようなテーマで探究を行えそうか、学校図書館から提案すると良いのではないかという流れが決定した。事前学習で調べるテーマとしては、ダムの仕組み、地理的な背景（気候）、ダムの水の供給経路、ダムに起因する水質変化、ダムに起因する周辺環境の変化（社会的背景）などが考えられるのではないかというアイデアが挙がった。以上のワークに要した時間は25分程度である。

3.2 私の履歴書をつくろう（第4回実施）

次のワークのシチュエーションは「海の家」である。この海の家は一風変わっており、人間ではなく、海に住む生き物を従業員として雇っている。受講者には海の生き物になりきってもらい、新たに従業員を募集することになった海の家オーナーに対し、自己PRをすることを求めた。ただし、PR内容は空想ではなく、何かしらの情報源に拠ることが条件である。情報源は授業の性質上、ウェブサイトを中心とし、サイトのURLを示すことができれば可とした。表3は受講者一人ひとりにあてがわれた生き物と自己PRの内容をまとめたものである。海を家の従業員として採用されるためには自分の長所、得意なことを適切にPRする必要がある。応募者の適性を知り、どのような仕事を任せられるかを判断するためには、体の特徴や居住環境といった情報も必須の情報であるといえる。

4匹（名）の生き物たちは自己PRを経て、無事に海の家採用決定となった。次に朝倉から「他の生き物の皆さんにはどんな仕事を担ってもらおうと良いでしょうか」と問いかけがあり、各々の自己PRの内容に基づき、皆でどのように仕事を分担すると良いかを話し合ってもらった。表4は受講者間のやり取りをまとめたものである。この協同学習ワークにはジグソー法の考え方が応用されている。ジグソー法とは別々の課題をメンバーに与え、互いの成果を持ち寄り、教え合うことで学習課題の全体像の理解を促すという協同学習の手法である⁽¹⁰⁾。以上のワークに要した時間は30分程度である。

表3 ワーク「私の履歴書をつくろう」における自己PRの内容

	設定した 生き物	自己PRの内容 (受講者の発言をそのまま引用)	用いた情報源 (受講者からの申告による)
A	ザトウク ジラ	沖縄近海にもいる、比較的小型のクジラです。私は回遊するクジラなので、冬の間は沖縄などの暖かい海にいますが、春になるとロシアやアラスカの冷たい海に移動します。その移動距離は数千 km に及びます。ですので、私の得意なことは長い距離を移動することです。また、長い距離を泳ぐために、長いときは 15～30 分くらい水中に居続けることができます。歌もとても上手で、数時間なら歌い続けることができます。耳たぶはないのですが、耳はよく聞こえます。上手に泳げるように、胸びれはとても長く、体長のおよそ3分の1あります。	美ら海生き物図鑑 http://oki-park.jp/userfiles/files/worksheet/20140318-kujira-n.pdf
B	アカウミ ガメ	私が住んでいるのは、四国に近い太平洋です。仲間が日本の太平洋側一帯と日本海側の石川県より南までいますから、その範囲で食材となる海の幸を集めに行くことができます。また、卵を生むときには砂浜に上がって過ごしますから、陸でじっくり活動することもできます。	1. ウィキペディア：ウミガメ https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%9F%E3%82%AC%E3%83%A1 2. 日本ウミガメ協議会附属黒島研究所：ウミガメの生態と一生 http://www.kuroshima.org/pg324.html
C	テナガダ コ	住んでいるところは日本各地の水深 200～400m のところ。泥底の穴に棲み、腕を表面に出しています。体の特徴は名前の通り手が長いので、得意なことは高いところや遠くの物を簡単に取り取ることができます。	市場魚貝類図鑑：テナガダコ https://www.zukan-bouz.com/syu/%E3%83%86%E3%83%8A%E3%82%AC%E3%83%80%E3%82%B3
D	ペンギン	南半球からやってきました。一応鳥ですが、飛べません。背中が黒で、お腹が白色です。陸では立って歩くことができます。海の中では泳げます。愛情深く浮気しません。離婚率は3%です。	すみだ水族館 https://www.sumida-aquarium.com/

表4 受講者間のやり取り

発言者 (生き物名)	発言内容
アカウミガメ	クジラさんは歌が得意ということなので、ぜひステージでライブをしていただきたいですね。
テナガダコ	ペンギンさんは陸での接客が向いていそうですね。
ザトウクジラ	テナガダコさんは腕が長いということなので、物を取ったり運んだりする仕事が向いていると思います。接客をペンギンさんが担当されるなら、調理などもいいかもしれません。
アカウミガメ	そうですね。カウンターに立ってあれこれ材料や調味料を取って料理するのがいいかもしれません。
ザトウクジラ	腕がたくさんあるので、注文が立て込んでも効率的に動けそうです。
ペンギン	クジラさんは遠くへの移動が得意なようですから、ライブの合間に「移動PR役」はいかがでしょうか。
アカウミガメ	体も大きくて目立つので、広告塔としてもいいと思います。
ザトウクジラ	頑張ってみます。ウミガメさんは陸も海も行けるそうなので、全体を見るマネージャー役はいかがでしょうか？
ペンギン	広告塔いいですね。
テナガダコ	テナガダコです。調理を担当してみたいです。
アカウミガメ	はい。どこでも手が足りないところをサポートできそうです。
ザトウクジラ	私は、得意の歌と大きな体を生かして、歌う広告塔として頑張ります。
テナガダコ	自分の足が隠し味です。
ペンギン	ウミガメさんはきっと長生きで、いろんなこと知ってるでしょうから、マネージャー兼顧客のうち高齢者担当はいかがでしょうか。
アカウミガメ	頑張ってみます。
テナガダコ	たくさんの手を使って調理パフォーマンスできます！
ペンギン	手は短いですが、ペンギンの友達連れてきますのでラインダンスならぬ、ペンギンダンスは得意です！
アカウミガメ	ペンギンさんはお友だちに Suica のキャラクターがいらっしゃると思うので、お願いして JR の駅でも宣伝してもらいましょう。
ペンギン	任せといてください！

なお、今回はウェブサイトを主な情報源として用いることとしたが、本ワークを実際に学校図書館現場に適用する際にはウェブサイトだけではなく百科事典や図鑑などを用いることが望ましい。自分とは程遠い、海に住む生き物を PR 対象としたところも重要なポイントである。子どもによってはプレゼンが苦手である、自分を PR することに抵抗があるという場合もあろう。しかし、百科事典などの情報源から調べた内容に基づき、自分とは違う生き物のことを紹介するという場面を設定する、いわば「ごっこ遊び」を通じてプレゼン能力を高めることを狙っている。具体的には、小学校中学年程度から実践可能と考えられる。

3.3 架空の修学旅行のしおりをつくろう（第13回実施）

本ワークはここまでに取り組んできた一連の協同学習ワークの集大成として実施された。本ワークの最終目標は修学旅行のしおりを作ることである。行き先は鬼ヶ島、参加者は桃太郎（班長）、イヌ、サル、キジである。朝倉は本ワークの構想にあたり、北向ハナウタ氏執筆の記事「架空修学旅行のしおりをつくる」を参考にした⁽¹¹⁾。

受講者は不思議な修学旅行のプランを想像し⁽¹²⁾、2泊3日の修学旅行のしおりを作成することになった。まず、朝倉から修学旅行のしおりに必要な要素として4点が提示された。これらの要素は、実際の修学旅行でも事前に押さえておくべき事柄である。

- ① 旅の目的…仲間との旅行を通じて、何を学び、何を得るか
- ② 行程表…集合場所、時間、乗り物、見学、体験、宿泊地など
- ③ 鬼ヶ島ガイド…地理、気候、名所、くらし、グルメ、お土産など
- ④ 持ち物・諸注意…準備しておくもの（こと）、注意点および健康管理

4つの要素について受講者それぞれに思いついたことを述べるとともに、提案されたアイデアをまとめる作業をディスカッション機能にて行うことになった。教員側でディスカッションを行うルームを4つ設定し、それぞれのルームで個々の要素について話し合う形態である。本ワークについては、野口も受講者と同じ立場で加わった。

①旅の目的のルームでは、「昔、戦いがあった場所を見学して勉強するというイメージを持ちました」、「旅の途中で（筆者注：現地の鬼たちへの）聞き込みにより、コミュニケーション能力を養う」、「鬼ヶ島ですから鬼がたくさんいるようですが、悪い鬼ばかりではないようですので、悪い鬼が何故悪い鬼になったのかにも興味があります」、「現地に語り部の鬼がいたら、話を聞くのが良いですね」といったやり取りがあり、鬼ヶ島への修学旅行の目的は鬼退治や観光が目的ではなく、鬼退治にまつわる平和学習とすることになった。

②行程表について話し合うルームでは、ある受講者からの「鬼ヶ島へはフェリーか何か通じているのでしょうか？」という発言を受け、移動手段について話し合われた。ここで野口は「小型船をチャーターするのか、それともいかだを手作りするのか…？」と発言した。それに対し、受講者から「島に行くことが目的ですので、しっかりした舟（船？）に乗った方がいいかもですね」、「学校の旅行ですから、救命胴衣が備えられた船でないと心配ですね」とあくまで学校の修学旅行であるという趣旨を踏まえた軌道修正がなされた。

一方、③鬼ヶ島ガイドを作るルームでは、「近くの村から宝物を略奪した歴史があるようなので、それを集めた美術館のようなものがあるかもしれませんね」というアイデアが出た。それを受け、受講者の一人が②行程表のルームにおいて、「見どころのところ（筆者注：③鬼ヶ島ガイドのルーム）で美術館の話が出たので、美術館に行く時間を設けるといいかもしれません」と発言した。この受講者は同様に、④持ち物・諸注意のルームでも「船に乗るそうなので、必要な参加者は酔い止め薬がいりますね」と発言している。4つの要素についてアイデアを述べるだけでなく、各ルームで行われている作業をつなぐ役割を果たしていたといえる。以上のワークに要した時間は30分程度である。

4 考察

本章では、学習活動支援特論における授業設計の意図、協同学習ワーク設計のねらいをまとめ、学校図書館員のリカレント教育においてeラーニング型協同学習を行う意義、可能性を考察し、今後の課題と展望について述べる。

4.1 授業設計の意図

授業設計にあたり最も強く意識したのが、学校図書館における「専門職」という言葉の再定義である。学校図書館員は長きにわたり、専門性を発揮する土台として“専任・専門・正規”という身分を強調してきた。それとはまた別の観点で、教育政策の動向や将来的な学習環境の変化を考えたとき、これまで学校図書館が積み上げてきたリソース（資料情報および学校図書館員個人の知識技術）に拠らず、広い視野と教育的な視点を持って学びをコーディネートできる存在が必要だと感じた。

児童生徒の探究心を引き出し「主体的、対話的で深い学び」の実現に寄与するには、探究プロセスを踏まえた知の獲得イメージをつかむことが重要である。しかし、探究学習を支援すべき学校職員の多くが“探究する”経験をしていないという現実がある。だからこそ、この科目を履修する学生自身が学習者として主体的に授業に参加し、触発的な体験を通して学びを体感する「ワークショップ形式」をメインに据えた授業を成立させることが必須であると考えた。また、学生を受講者ではなく“地域社会における教育実践者”として扱うことで、教える、教わるという一方的な関係性ではなく、お互いが学び合う関係性であることを意識させるスクーリングになることを目的とした。

4.2 協同学習ワーク設計のねらい

受け身になりがちな通信学習で能動的な参加を促すには、学習者ひとりひとりが役割と責任を持ち、その成果が集約され、場としての学びに反映されるという状況を作り続ける必要がある。講義で取り上げるワークについては、いずれも協同学習の体裁となるよう、下記の点を意識して設計した。

(1) 八洲学園大学の遠隔学習システムを極限まで活用するものであること

複数のディスカッションルームによる少人数での協同学習、スライド画面への直接的な書き込みによるグラフィックレコーディング、ウェブ検索をベースにしたジグソー法の導入については先述した通りである（3章参照）。学生同士でのやりとりがチャットでのテキスト入力に限定されるため、個別学習の様子が即座に共有でき、その成果が共同作品につなげられるような仕組みを整えた。

(2) 学生自身がワークを実施する側となることを意識し、進行イメージが持てるものであること

講義で扱うワークは学校現場での図書館活用授業を想定したものであり、小学校の授業時間に収まる45分以内で実施できるように作成している。各講義は①概論、②ワーク、③解説（ワークの設計意義と進め方のポイント）という流れで構成し、学生には、児童生徒が実際に学ぶ姿を疑似体験してもらいつつ、並行してファシリテーション技法の伝達を行った。

(3) 様々な学習環境に応用でき、発達段階やレディネスを踏まえたアレンジが可能であること

子どもたちが学ぶ環境は様々である。地域特性、学校種や規模、教育目標、児童生徒の能力や目指すべき姿を見すえて、教育活動には常に工夫が求められる。それらを踏まえ、実際の学校現場で応用

がきき、図書館職員のキャリアを問わずに実施できる自由性を持ったワークにこだわった。講義内で示すワークはあくまでも実施例である。設計にあたっての理念をもとに、学習環境に合わせてアレンジできる力を身につけてもらうことが、この講義における目標のひとつである。

(4) ゲーム的な仕掛けやドラマ性を取り入れ、自然と楽しめるような流れを作ること

子どもたちの学びは遊びの中から生まれる。探究学習としての成果を求めるあまり、教育的な意義の押しつけになってしまえば本末転倒である。3.2 で記した「ごっこ遊び」は、学習への心理的なハードルを下げるとともに、想像力を喚起させ、創造性を促す演劇的な仕掛けである。また、児童生徒が個々で自認する能力差にとらわれず、スタートラインを揃えることも重視した。

これらの意図を踏まえて実施したのが、18種の協同学習ワークである。いずれにおいても、1. 探究学習者の視点、2. 授業実施者の視点、3. eラーニング型協同学習ワーク評価者の視点の3点を意識させるよう心掛けた。

4.3 学校図書館員のリカレント教育にeラーニング型協同学習を取り入れる意義、可能性

ライブ形式のスクーリングとはいえ、目の前に学習仲間がいないという状況では、精神的な断絶が発生しやすい。顔も知らない相手とのやりとりに戸惑いが生じるのも当然である。そこで初回講義は授業内容のガイダンスと合わせて、アイスブレイク的なワークをいくつか試しながら距離感をつかんでもらった。また、遠隔学習のデメリットとして、学習者のダイレクトな反応が得にくいこと、習熟度の把握が困難であることなどが挙げられる。学生の理解度と学習定着度を確かめるべく、あらかじめ授業の進行に沿ったワークシートを配布し、授業記録を小レポートとして提出させる方式を採った。

ワークシート内には、チャットに転記するための下書きフォーム、感想や記録のフリースペースを設け、あわせて参考サイトのウェブリンクも示している。提出されたシートの記述内容からは、どの学生も教員の意図を汲んでスムーズにワークを楽しめた様子が窺われた。講義内で指示された内容は十分に記入されており、パソコン画面のスクリーンショットやチャットのログをコピーして貼りつけるなど、各自で授業内容を残す工夫も見て取れた。限られた学習環境の中においても、自らの知識を引き出し、他の学生から得た情報を活かして育てるという体験はできたのではないかと。

実際のところ、レスポンスの感触や成果品の出来映えは、担当教員（朝倉）がこれまで手掛けてきた対面型ワークショップと変わらない。ただし、eラーニング型協同学習を成り立たせるためには、授業担当者のみならず、学習者にも授業参加への高い意識が求められることがわかる。全体の様子を把握することが困難な状況では、どれだけ意図が伝わっているか、今どういう状況で進められているか、常にリアクションを返さなければならない。協同学習は必ずしも楽しいものではなく、親しくない相手とのやりとりは多少なりとも苦難を伴う。顔の見えない相手との遠隔学習に臨んだ学生にとって、実際に学校現場で向き合うであろう子どもたちの不安感は想像に難くない。だからこそ、遠隔、対面を問わず、協同学習における困難さの経験をしておくことが大きな意味を持つ。

近年は多くの学校でデジタル機器の充実が図られており、遠隔学習の可能な環境が整いつつある。テレビ会議システムや電子黒板などのICT機器により、教育環境における地域差や経済的な問題がデジタルのちからで乗り越えられる時代である。しかし、教育現場でそれらのメディアを活用しよう、子どもたちの学びにつなげようという意識が広がらない限り、マニュアル的な利用の範疇に納まってしまうことは確かである。実際にeラーニング型協同学習を体験した学生は、遠隔学習や情報教育に

あたる際の説得力が増すと考えられる。子どもたちの学習環境を踏まえて様々なメディアの活用を模索した経験を自信につなげられれば、学校図書館を拠点とした「eラーニング型協同学習」という新たな教育の可能性を広げる役割を担うこともできるだろう。

4.4 今後の課題と展望

将来的な教育環境の変化を想定して設計した図書館教育科目は、これまで学校図書館員が積み重ねてきた実践や現実的な業務とは相反する部分もある。現職経験が長く、学校図書館員としての方法論を確立している者ほど、この講義の内容や進め方に抵抗が大きいと考えた。だからこそ、これまで学校図書館が目指してきた道から続く新たな方向性を見出し、発展させられるような専門職像を描けるような構成を行った。しかし、実際の当科目履修者には学校図書館勤務経験のない学生も多く、学校図書館での業務を下敷きにした部分については、学生それぞれのバックグラウンドが活かせる内容に適宜変更しながら対応することとなった。

そのことが功を奏したと感じたのは、様々な立場の学生が学校図書館を柔軟にとらえ直し、あらゆる可能性を内包した空間として共有できたことにある。現職の学校図書館職員も、他の学生から出された豊かな発想を「どうやったら現場での実施が可能か」と前向きに受け止め、実践報告を交えながら周囲に示唆を与えた。また、受講学生が全国各地にわたることで、地域性、自治体の特性なども垣間見ることができた。学生同士の触発的な知の体験が、それぞれの持つ「学校図書館」への思い込みを手放し、心理的な壁をゆるやかに壊すことにつながったのである。

当然ながら、履修学生に学校関係者が含まれていない場合も、学校関係職員のみが集まる場合も想定される。その時々に合わせて情報を補充しながら、学校が社会と接続する意味や、専門家との連携の重要性を再確認する機会を持ち続けていく必要があるだろう。

今後の展望としては、情報基盤をもって社会と学校をつなぐコーディネーターとしての役割を学校図書館専門職に求めたい。そのためには、当科目の履修目的を単なる個のスキルアップとせず、地域での教育活動に還元するための意識づけをしていく必要がある。将来的な社会に求められる人材に必要とされる能力を見定め、教育課程に紐づけながら「図書館資料を含めた情報活用」、「連携による人材の活用」、「学校内外の空間活用」の3点を基にビジョンを描き、ワークショップ形式の探究学習やメディアを活用したeラーニングをコンテンツの形に整えつつ実践を重ねていくことが、学校図書館専門職の意義を示していくことにつながる。そのプロセスを踏む中で「協同学習」の意味は見出せると考える。

5 おわりに

本稿では、学習活動支援特論の授業実践をもとに、学校図書館員のリカレント教育においてeラーニング型協同学習を取り入れる意義、可能性について検討してきた。授業中の発言や提出物（レポート、ワークシート）の研究目的による利用を快諾くださった受講者の皆さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

注・参考文献一覧

- (1) 2019年度学習活動支援特論シラバスより引用。
- (2) 関田一彦「創価大学における協同学習法の意味づけ」『創大教育研究』no.13, 2004, p.53-57.

- (3) Johnson,D.W.,Johnson,R.T.,Smith,K.A. 『Active learning: Cooperation in the college classroom』 Interaction Book Co, 1991. 同書の翻訳版として、関田一彦監訳『学生参加型の大学授業：協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部, 2001.を合わせて参照した。
- (4) 安永悟「協同による大学授業の改善」『教育心理学年報』 vol.48, 2009, p.163-172.
- (5) 安永悟「協同による活動性の高い授業づくり：深い変化成長を実感できる授業をめざして」『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を深化させるために』勁草書房, 2015, p.113-139.
- (6) 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 2014.
- (7) 本学の学校図書館専門職養成プログラム開設の経緯、開設後の状況については、第 105 回全国図書館大会三重大会にて報告を行った。詳細は以下の報告資料を参照されたい。
野口久美子「学校図書館員のリカレント教育：八洲学園大学の取り組み」第 105 回全国図書館大会三重大会（第 6 分科会・図書館情報学教育）, 2019.11, http://105th-mietaikai.info/files/uploads/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E6%83%85%E5%A0%B1%E5%AD%A6%E6%95%99%E8%82%B2_%E5%A0%B1%E5%91%8A%E5%8E%9F%E7%A8%BF.pdf, (参照 2020-02-08).
- (8) ちなみに、同じく応用プログラムの要件科目として新たに開設した「読書教育特論」は、基礎プログラムの「読書と豊かな人間性」の応用編に位置づいている。
- (9) 研修講師としての成果の一部は、以下の報告で紹介されている。砂生絵里奈「図書館実験室りぶらぼ！：小・中学校図書館職員向けワークショップ型研修の試み」『学校図書館』no.801, 2017, p.82-84.
- (10) 杉江修治『協同学習入門：基本の理解と 51 の工夫』ナカニシヤ出版, 2011.
- (11) 北向ハナウタ「架空修学旅行のしおりをつくる」デイリーポータル Z, 2018.5, <https://dailyportalz.jp/kiji/180514202871>, (参照 2020-02-08). なお、授業設計に先立ち、北向氏にアイデアを応用する許諾を得ている。
- (12) 実際にはない架空のシチュエーションにつき、想像というより妄想と言った方が正確かもしれない。

(受理日：2020年2月10日)